

循環型社会を考えることは未来社会を構想すること

谷口 吉光（秋田県立大学生物資源科学部教授）

ごみは毎日の生活や産業から否応なしに出てくるから、ごみ問題の議論は目の前のペットボトルや生ごみをどうするかという話になりがちだ。そうした議論も必要だが、それだけでは大量生産システムが生み出す膨大なごみの始末に追われるだけだろう。

そんな下請けの議論に終わらず、「現在のごみ問題全体をどうしたらいいのか」という大局の視点に立つ必要がある。その時、「循環型社会」という概念には学ぶべき点が多い。これについて私は2本の論文を書いたので詳しくはそれを見ていただきたいが、要点は次の通りである（「循環型社会の原論的把握と環境社会学への示唆」『環境社会学研究』17号、2011年、インターネットで閲覧可能。「生ごみと堆肥」『食と農の社会学』ミネルヴァ書房、2014年）。

第一に、循環型社会はほとんどすべてのごみが資源として再利用されるような社会である。だから循環型社会が実現すれば、「ごみ」というものはほとんどなくなり、「ごみ処理」という言葉は「資源循環管理」という言葉に代わっているだろう。

第二に、循環型社会では地球の物質循環と生物の生命活動が調和しなければならない。言い換えれば、人間や他の生きものの生命をひどく脅かすような量や質の物質を自然界に放出することは許されない。だから有害化学物質はもちろん、マイクロプラスチックや遺伝子組み換え農産物なども「健全な資源循環を脅かす」として規制の対象になっているだろう。

第三に、循環型社会では循環の規模がきびしく問われるだろう。循環すること自体

はいいことだとしても、規模が大きくなれば輸送や貯蔵にエネルギーや資源が余計にかかるから、できるだけ小さな規模での循環が求められるようになる。「地域資源循環」が基本とされ、現在の日本がやっているような森林資源を海外から輸入して紙を生産し、その古紙を途上国に輸出してリサイクルするような地球規模の循環は非難されるようになるだろう。

以上、循環型社会の特徴を3点挙げただけで、それが現在とはまったく違った社会だということがわかるだろう。理念としての循環型社会と現在の大量消費社会の間には基本的な社会の価値観と社会経済構造の点で絶対的な隔絶があると私は考えている。だから分別やマイバッグの普及などの努力を続けるだけでは、その延長上に循環型社会が実現すると考えることはできない。

望むべき未来の理念としての循環型社会を思い描き、そこから逆算して、それを実現するために今何をしたらいいかを考える、いわゆるバックキャスト（back casting）のアプローチが必要である。これは持続可能な社会への転換（トランジション）を進める方法論としてヨーロッパで考案された手法だが、日本でももっと注目してほしい。

このような未来構想の作業を進めるためには、現在のグローバル資本主義を根本から批判し、それに代わるオルタナティブな（代案となる）社会を心から求める人びとが結集しなければならない。協同組合運動はこうした条件を満たしていると思うが、どうだろうか。